YOL 讀賣新聞オンライン

最古級の石器、広島・冠遺跡で新たに４００点超…地磁気極の大変動の痕跡発見も期待

2025/10/15 16:24

昨年、国内最古とみられる約４万２０００年前の中期旧石器時代（約１３万年～約３万８０００年前）の石器が出土した冠（かんむり）遺跡（広島県廿日市市吉和）で、奈良文化財研究所（奈良市）などの追加発掘調査が９月に行われ、最古級と同時代の地層から大量の石器が新たに見つかった。出土地層の詳しい年代測定や分析のため、地球科学分野の研究者も参加。この年代は地磁気極（Ｎ極、Ｓ極）の大規模な変動が起きたことが知られており、地球規模の環境変化の痕跡発見も期待される。（木下聡）

追加調査が行われた冠遺跡（広島県廿日市市で）

冠遺跡は、山口県境に近い中国山地の標高約８００メートルにあり、旧石器時代の遺跡として５０年以上も調査が続けられている。

同研究所の国武貞克・主任研究員らによる調査は２０２３年から毎年９月に実施され、今回が３回目。前回までに五つの文化層（石器が集中する深さ）を確認し、各層で見つかった炭化物を放射性炭素（Ｃ１４）年代測定法で調べたところ、最上層部は２万８２００年前、最下層部は４万２３００年前のものとわかった。

最下層部からは石器３７６点が出土。先端をとがらせた尖頭（せんとう）器、幅の広い直線的な刃を持つ「クリーバー」などがあった。それまで学界で広く認められていた最古級の遺跡は３万７０００年前あたりのものだったことから、冠遺跡の石器が最も古く、人類が日本列島で生活を始めた時期も従来説から遡る可能性が浮上している。

約２週間行われた今回の調査では、前回掘った溝から南約１０メートルの地点に、最下層部と同年代とみられる層が見つかり、約２５平方メートルの範囲を掘り進めたところ、４００点以上の石器が出土した。国武主任研究員は「石を打ち割って石器を作っていた場所ではないかと思われる。中国など東アジアの同年代の石器とも比較し、ここで暮らしていた人たちがどこからやって来たのか推定できれば」と話す。調査は来年９月も実施する予定だ。

冠遺跡、地球科学研究でも注目

約４万２０００年前という年代は、地球科学研究の分野でも注目されている。

地球は一つの大きな磁石のようなもので、大規模な磁場（地磁気）に覆われ、現在はＳ極が北極に、Ｎ極が南極の近くにある。地球規模の時間経過の中では、これら地磁気極の位置は一定でなく、約７７万年前には両極が逆転する大変動が起きた。逆転ほどではないものの、Ｓ極が南半球まで動くなど、類似の現象は何度も起きている。中でも、直近でかなり大規模な変動があったとされるのが約４万２０００年前だ。

地磁気は、宇宙から降り注ぐ放射線などに対するバリアの役割を果たしているが、こうした変動があると弱まる。地磁気極の変動は地球環境や生物の活動にも影響を与えると考えられている。約４万２０００年前はネアンデルタール人の絶滅時期に比較的近いことからも、その変動が注目を集めているという。

調査に参加し、地質試料を採取した山本裕二・高知大海洋コア国際研究所教授（古地磁気学）は「変動の痕跡が石器の出土層で確認できれば、Ｃ１４の分析結果と合わせて年代確定の証拠となる。変動の発見例は湖底や海底がほとんどで、地上の試料で確認できればとても貴重だ」と語り、分析作業を進めている。

関西発の最新ニュースと話題